うたごえ運動指導者の訳詞

―戦後日本における「ロシア民謡」の受容と変容

The Lyrics Translated by "Utagoe (Singing Song) Movement" Leaders: Reception and Adaptation of "Russian Folk Songs" in Postwar Japan.

浜崎 慎吾
HAMASAKI, Shingo

はじめに

1950～60 年代の日本は「ロシア民謡」がブームだった。本研究で対象とする「ロシア民謡」は戦後日本に入ってきた民謡を含むロシア・ソヴェト大衆歌謡を指す。シベリア抑留者たちが持ち帰った歌は、本来のロシア民謡と革命後に民謡調のメロディで主としてプロパガンダ目的で作られたソ連の大衆歌謡が入り混じっていた。抑留者音楽集団のメンバーには当然その区別はついていたが、彼らが帰国後にそれらの歌を広め受容される過程で、全ての曲を「ロシア民謡」とする呼称が定着してしまった。その理由はいくつかある。最も大きな要素は、朝鮮戦争（1950-53）とそれに続く東西冷戦下の日本で「ソ連歌謡」を歌うことは、会場使用を断られるなどの障害があったため、全てを「昔からの民謡」と誤認させるほうが安全だったからというのが真相のようだ。

ほぼ同時代に流行したアメリカのフォークソングと違い「ロシア民謡」は殆どがロシア語から日本語に翻訳して訳詞で歌われてきた。日本における「ロシア民謡」の受容を追究するのに重要なポイントは、原詩と訳詞の比較にあると考え研究を続けてきた。合唱団白樺が 60 年間に定期演奏会などで歌った 383 曲のうち演奏回数が上位、すなわち 4 回以上演奏された 83 曲について歌詞カードを作成し、そのうちの受容のされ方に特徴がある 13 曲について考察し、2013 年に最初の論文とした。その後の研究継続の一端が本研究ノートである。

ロシア音楽の日本における研究は沢山あるが、研究対象の多くはロシアの芸術音楽であり、大衆音楽に属する「ロシア民謡」の日本での研究は断片的である。訳詞で歌われたことに着目して論じている研究も少ない。「ロシア民謡」の受容はロシア以外の外国から来た民謡のどれよりも広範かつ持続的に行われた。ブームを起こした大きな要素が、うたごえ運動と訳詞の存在であった。担い手の活動を現在でも直接観察できる団体のひとつに 1950 年創立の合唱団白樺がある。この合唱団白樺はパネル標本となりうる研究対象である。彼らが歌い続けてきた活動がうたごえ運動の内部のみならず、歌声喫茶へと広がり、さらには、ダークダックスやボニージャックスなども歌い、「ロシア民謡」は国民的に流行した。

1. ４人の訳詞者たち

「ロシア民謡」の流行の背景には、うたごえ運動や「ロシア民謡」の合唱団を指導した音楽家たちの存在があった。そのなかでも特に影響が大きかった 4 名の音楽家たちの活動のうち訳詞について本稿では考察する。4 氏の略歴を主としてそれぞれの著書の記載内容等から抜粋する。

① 関鑑子とうたごえ運動・中央合唱団

関 鑑子（せき あきこ）は、 1899 年（明治 32 年）9 月 8 日生れ。本名小野鑑子。東京出身。東京音楽学校声楽科を卒業し、ソプラノ歌手になったが、大正末期からプロレタリア芸術運動に参加。 1926 年（大正 15 年）、新劇俳優の小野宮吉と結婚。1929 年（昭和 4 年）、プロレタリア音楽家同盟に参画し、初代委員長になる。この運動はその後弾圧を受け一時消滅。

1948 年（昭和 23 年）、中央合唱団を創立。

1951 年（昭和 26 年）、音楽センター主宰者になって「うたごえ運動」を展開する。この運動は、コーラスによる平和運動として全国に広がり、1954 年（昭和 29 年）には 3 万人の大集会に発展した。

1956 年（昭和 31 年）、国際レーニン平和賞受賞。

1973 年（昭和 48 年）5 月 1 日、メーデー集会の壇上で倒れ、翌 2 日にくも膜下出血のため死去。享年 73。

「収穫の歌」「カチューシャ」「モスクワ郊外の夕べ」「全世界民主青年歌」「ウラルのぐみの木」など、ロシア語の大衆歌曲の訳詞を多く手がけている。うたごえ運動最大の功労者であり「ロシア民謡」を含む大衆歌謡の合唱指導者であったが、自著書は極めて少なく、活動内容を書籍で知る手掛かりは娘（小野光子）や弟子たちの著書である。

② 北川剛と合唱団白樺

北川剛は、本名高橋 剛(たかはし　ごう)。

1921（大正 10）年 6 月 24 日生、1986（昭和 61）年 1 月 7 日没。 出生地島根県

合唱指揮者 音楽評論家

合唱団　白樺　常任指揮者,日ソ協会理事

武蔵野音楽学校声楽科を 1943 年（昭和 18 年）繰り上げ卒業し出征。

終戦後シベリアに抑留され、チェリスト井上頼豊、バイオリニスト黒柳守綱等と「沿海州楽劇団」を作る。収容所を慰問すると同時に、現地の人々と交流、「ロシア民謡」を吸収する。

帰国後、関鑑子の中央合唱団活動に参加。1950 年（昭和 25 年）合唱団 白樺を発足させ没年まで長年指導にあたる。他にも東京労音合唱団、横浜労音合唱団、合唱団「道」などを指導・指揮。40 年間にわたって「ロシア民謡」の研究、普及につとめ、著書に『ロシア民謡アルバム　解説付』(音楽之友社　1959)『民族と風土のうたごえ　ロシア民謡の歴史』(音楽之友社 1968)`　『ロシア民謡、我が生涯』(芸術現代社　1986)などがある。尚、井上がその著書に述べているが、北川は過酷な抑留生活中に声帯をいためてしまい、帰国後に声楽家としては復活できなくなったので、合唱指導者にならざるを得ないという事情もあったようである。

③ 井上頼豊と「ロシア民謡」「ソヴェト歌謡」

井上 頼豊（いのうえ よりとよ）は、1912 年 11 月 19 日生、 1996 年 11 月 18 日没。

チェロ奏者、音楽教育者。日本チェロ界の代表的先駆者のひとり。東京音楽学校（現・東京藝術大学音楽学部）中退。1934 年から 1943 年まで新交響楽団（現在の NHK 交響楽団）のチェロ奏者。

アジア太平洋戦争に徴兵され出征し、1945 年終戦時にソ連に抑留され、1948 年にシベリア抑留から帰国。

戦前もプロレタリア音楽家同盟に参加していたが、抑留生活から帰国後はうたごえ運動の理論、音楽面の指導者としても活動した。 1961 年、来日したパブロ・カザルスに公開レ

ッスンを受ける。
1974 年、第 5 回チャイコフスキー音楽コンクールのチェロ部門審査員。以降第 8 回まで務める。パブロ・カザルスを敬愛し、「鳥の歌」を愛奏した。うたごえ運動を担っている株式会社音楽センターが製作したＣＤ録音に、ベートーヴェンのチェロソナタや日本のチェロ曲などがある。 音楽教育者として、桐朋学園大学や同大学附属「子供のための音楽教室」で後進の指導に当たり、執筆活動では、ショスタコーヴィチやプロコフィエフの伝記を著すなど、日本での彼らの音楽受容に貢献した。著書は、「ロシア民謡」関連に限らず音楽の広範なジャンルにわたる。

④ 蒲生眞郷と合唱活動を通じての訳詞活動

蒲生眞郷（がもう　まさと）（1922-1986）は、東京工業大学卒業と同時に母校の助手。工学博士。その後は東京農工大学の教官となり、定年に至るまで東京農工大学教授。
1953 年から亡くなる 1986 年まで 33 年にわたり合唱団 白樺団員。数多くのロシア民謡、ソヴェト歌曲の訳詞があり、その集大成としての著書『ロシア民謡 ソビエト歌曲　訳詞百選』（新読書社 1986 年）が没年に発刊された。
合唱団白樺の訳詞活動に 4 人のなかでもっとも貢献したのは蒲生かもしれない。現在も継続している約 15 人から構成されている訳詞グループである白樺の研究会が保有するロシア民謡・ソヴェト歌謡のロシア語楽譜の殆ど全ては蒲生が個人で収集したものであり、全て白樺に寄贈された。

4 人のうち 3 人がプロの音楽家、1 人が理系の学者で、いずれも職業柄あるいは趣味としての並はずれた音楽好き、それも「ロシア民謡」好きだった彼らは、「ロシア民謡」のメロディ（旋律）がまず気に入り、それぞれが気に入った曲の歌詞をロシアの原曲に乗せて歌えるよう翻訳した。合唱団白樺が定期演奏会などの公式コンサートで 65 年間に亘り演奏してきた約 400 曲のうち、前述のように、歌った回数が多い順に選択した「ロシア民謡」83 曲を対象に筆者は歌詞カードを作成したが、このうち 29 曲の訳詞が本稿の 4 人のロシ。ア民謡の指導者自身の手になるものである。内訳は、関鑑子 5 曲、北川剛 6 曲、井上頼豊 8 曲、蒲生眞郷 10 曲。但し、4 人のうちの 2 人による共訳、4 人のうち 2 人が同じ原詩からそれぞれが別の訳詞をした曲もある。

訳詞が個人名ではなく、団体名で示されている曲も数多くある。具体的には合唱団 白樺、関鑑子記念中央合唱団、音楽舞踊団カチューシャ（通称　楽団カチューシャ）、東大音感研究会等。建前は白樺研究会のケースのようにメンバーの共同訳であるが、実際にはグループ内の特定個人である場合が多い。楽団カチューシャとされている訳詞のほとんどは森おくじ（本名奥治、1925-2008）であったようだし、合唱団白樺のメンバーのうち訳詞が個人名になっている北川剛、蒲生眞郷、大胡敏夫以外の訳詞も実は特定の個人が訳を担当していることが多い。蒲生の訳詞も当初は「合唱団白樺訳」と記されていた。その理由は、プロの音楽家は個人名で発表、音楽のアマチュアは所属団体名で発表を原則としていると古くからの白樺団員は述べている。

4 人による 29 曲全てを取り扱いたいが紙幅の関係上、本稿では、比較できる二つの訳詞が存在する『カチューシャ』(関と井上が別々の訳詞)、『ロシア私の故郷』(関と蒲生が別々の訳詞)、および、北川剛『行商人』、蒲生眞郷『ダッタン人の踊り（ポロベッツ人の踊りと歌)』の 4 つの歌詞を観察する。

2. КАТЮША カチューシャ

Слова Михаила Исаковского
Музыка Матвея Блантера

Расцветали яблони и груши,
Поплыли туманы над рекой.
Выходила н**а** берег Катюша,
На высокий берег, на крутой.

Выходила, песню заводила
Про степного сизого орла,
Про того, которого любила,
Про того, чьи письма берегла.

Ой ты, песня, песенка девичья,
Ты лети за ясным солнцем вслед
И бойцу на дальнем пограничье
От Катюши передай привет.

Пусть он вспомнит девушку простую,
Пусть услышит, как она поет,
Пусть он землю бережет родную,
А любовь Катюша сбережет.

Расцветали яблони и груши,
Поплыли туманы над рекой.
Выходила на берег Катюша,
На высокий берег на крутой.
1938
(下線は筆者)

（逐語訳）
作詞：ミハイル・イサコフスキー
作曲：マトヴェイ・ブランテル

1.リンゴや梨も花咲き始めていた
川の上に霧が流れだした
カチューシャは岸辺に出てきた
高い険しい岸の上に

2. 出てきて歌を口づさんだ
草原の青い鷲について
愛しい人について
手紙を大切にしている相手について

3. ああ歌よ乙女の歌よ
明るい太陽を追って飛び
遠い国境の戦士に
カチューシャのあいさつを伝えよ

4. 彼が素直な乙女を想い出すように
彼女が歌うのが聞こえる様に、
彼が祖国の大地を守る様に、
そして彼の愛をカチューシャが守る様に

5. リンゴや梨も花咲き始めていた
川の上に霧が流れだした
カチューシャは岸辺に出てきた
高い険しい岸の上に

井上頼豊　訳詞
1. 霧は水面にこめて
　りんごの花かおる
　そのなべに立てるカチューシャ
　うるわし汝が瞳
2. いとしおもかげしのび
　カチューシャは口ずさむ
　はてしなきステップ守る
　たけき鷲のうたを
3. ひびけおとめの歌よ
　つたえよそのこころ
　かがやける空の彼方
　銃とるますらおに

関鑑子・丘 灯至夫・訳詞
1.リンゴの花ほころび
　川面にかすみたち
　君なき里にも
　春はしのびよりぬ
2.岸辺に立ちて歌う
　カチューシャの歌
　春風やさしく吹き
　夢が湧くみ空よ
3.カチューシャの歌声
　はるかに丘を越え
　今なお君をたずねて
　やさしその歌声

4. おもえたけきますらお
カチューシャの歌ごえを
祖国とともにかおれ
勝利のあしたまで

4. リンゴの花ほころび
川面にかすみたち
君なき里にも
春はしのびよりぬ

「カチューシャ」のメロディを筆者は、歌詞はロシア語でも関/丘の訳詞の日本語でも何度も聴いたり自身が口ずさんだりしてきた。だが資料を読み直して、今回初めて井上頼豊も訳詞をしていることが分かったのは成果のひとつだった。井上は訳詞だけでなく原詩の対訳も著書『ロシアの民謡』に載せている。白樺や北川、井上たち、「ロシア民謡」を演奏するのと並行して訳詞を作ってきたグループは、訳詞と原詩の中間にある、楽譜にのることをあらかじめ意識しての翻訳を「素訳」と称している。井上の上記の訳詞と素訳を並べてみる。

井上頼豊　素訳[1]	井上頼豊　訳詞[2]（再録）
1.	
りんごと梨の花が咲いて	霧は水面にこめて
河面に霧がたちこめている	りんごの花かおる
その岸べにカチューシャが出てくる	そのなべに立てるカチューシャ
高くけわしい岸べに	うるわし汝が瞳
2.	
出てきて歌いはじめる	いとしおもかげしのび
荒野の藍色の鷲のことを	カチューシャは口ずさむ
彼女の愛する人のことを	はてしなきステップ守る
彼女に手紙をくれた人のことを	たけき鷲のうたを
3.	
おお 歌よ 乙女の歌よ	ひびけおとめの歌よ
太陽を追ってとんでゆけ	つたえよそのこころ
とおい国境の兵士に	かがやける空の彼方
カチューシャの挨拶をつたえよ	銃（つつ）とるますらおに
	おもえたけきますらお
	カチューシャの歌ごえを
	祖国とともにかおれ
	勝利のあしたまで

並べて観察すると、井上の訳詞は原詩が有する内容を字数制限があるなか、かなり忠実に伝えることに成功していることがわかる。
井上は「カチューシャ」を『ロシアの民謡』（1951 年刊）では、楽譜にはこの自身の訳詞を付したうえで

> 同じ作曲者.の『カチューシャ』（曲集参照）は 1942 年の作で、村の乙女が前線の恋人にささげる純情を、テンポのはやいいきいきした新鮮な感覚で歌いあげた。

[1] 井上頼豊『ロシアの民謡　附　ロシア民謡歌曲集』p.93
[2] 同上　「附　ロシア民謡歌曲集」p.38

と解説[3]し、「歌い方」[4]は、

> 行進曲のテンポで、あかるくはぎれよく歌う。特に合唱の部分はリズムをはっきり出すこと。原曲では、四節まで歌ったあと、再び第一節を歌うようになっている

と指示している。翌年の『ソヴェト合唱曲集』（1953 年 2 月刊）では、訳詞は自作のものから関鑑子のものに差し替えているが、解説と歌い方[5]は上記の著作とほぼ同じで

> 村の乙女が前線の恋人にささげる純情と愛を歌った傑作。戦争中から戦後にかけて非常に好まれ、すべてのソヴェト人にうたわれた。1942 年作
> テムポがおそくならぬようにいきいきと新鮮な感じで歌う。

としている。井上がこの著作に載せている訳詞は、丘灯至夫による改作版ではなく、後述する関の単独作である。井上の解説と歌い方の指示は、自身の訳詞にも影響しているようである。つまり、主人公は村の乙女だが相手役の前線の兵士の描写も意識した訳詞となっている。「荒野の藍色の鷲」の描写は「たけき鷲」という訳詞として日本語になっても残る。流行らなかったこの井上の訳詞と関/丘との違いは、後者が乙女の描写に絞り込まれ、兵士の影はうすく、かくして歌の背景にある戦争のイメージも希薄になっていることである。

関と井上の文字通りの同志である北川も『ロシヤ民謡アルバム 解説付』(1959 年刊) に、完成版であり商業版でもある関/丘訳のものを載せて解説している。北川の分類によれば、カチューシャは、たたかいの歌であり恋の歌でもある。北川が抑留されて 3 年ぐらい経ったときにウラジオストク近くの鉄道駅で目撃した兵士入隊風景をもとにした長い解説の一部[6]を引用する。

> 私はこの光景を見ながら、私たちが直接経験したことのある日本の歓送風景との大きな相違を考え、しばらく呆然としてしまったのです。ロシヤ人たちは恐らく大戦のときも『勝ってくるぞと・・・』式な送りかたをしたのではなく、別れの涙を思いきり流しながら兵士たちを見送ったに違いありません。ただ、別れの悲しさ、寂しさや辛さ、そしてあふれでる涙がそのまま侵入してきたドイツ・ファシスト軍への憎しみにつながり、それが祖国愛の焔に燃えひろがっていったのでしょう。こうした暖かい愛情に包まれながら前線に向かう兵士と、それを見送る恋人や妻の感情をうたった多くの歌の中で、われわれに最も親しみ深かった曲は「ともしび」であり「カチューシャ」でしょう。

北川と同じような体験をして、抑留時代も帰国後も行動を共にする機会が多かった井上にも、北川と似た心情があったとすると、井上は「カチューシャ」の訳詞から戦場と兵士の描写をなくすことはできなかったし、戦場の体験がない関とは違う訳詞になるのは当然かもしれない。

ソヴェトという初の社会主義国の国策による戦時歌謡として本国では完成したこの歌が、戦後の平和を希求する日本では、原詩の内容そのままでは世相に馴染まないので、関の訳詞が、コロンビアレコード専属作詞家の丘により、商業化目的のレコードの歌詞に改

[3] 井上頼豊『ロシアの民謡　附　ロシア民謡歌曲集』p.93
[4] 同上「附　ロシア民謡歌曲集」p.38
[5] 井上頼豊編『ソヴェト合唱曲集』p.28
[6] 北川剛編『ロシヤ民謡アルバム　解説付』p.49

良をされる際に、意図的に主題がずらされた。
　井上頼豊は次のように「ソヴェト歌曲」全体の特徴を要約[7]し讃美しているが、特に「カチューシャ」を「バルカンの星の下で」と共にその代表曲と紹介している[8]。
井上が記述しているのは、主としてメロディに関してのものであるが、井上のソヴェト連邦と社会主義に対する傾倒ぶりが滲み出ており、その心情が井上の「カチューシャ」の訳詞にも影響していると考えるので以下に引用する。

1.ロシア民謡にくらべて音楽的に高度であり、形式がより多様化していること。
2.ロシア民謡の哀愁感と、新しい感覚である明快な健康さとが統一されていること。
3.内容においてソヴェト社会の現実の生活をいきいきと反映していること。
4.ソヴェトになってはじめて開花したソ連邦内各民族の民謡の影響が、ソヴェト歌曲に多様かつ多彩な内容の豊富化を与えていること。

井上がここで言及しているロシア民謡が何を指すのかについては、既に 2013 年の論文[9]で詳述したように、フォークロア〈民俗、民間伝承〉のうちの民俗音楽を指している。作詞者も作曲者も不詳、あるいはどちらかが不詳の本来の民謡とは違い、「ソヴェト歌曲」はソヴェト時代の一流の作者（作曲家、詩人）たちによるより高度な曲であることを井上は言っている。また、「哀愁感」と「新しい感覚である明快な健康さ」が統一されたと述べているのは、1917 年の革命までは、識字率が全国民の僅かに数パーセントであり、さらに 50 年遡る 1861 年までは、人口の大半を占める農民が皇帝と貴族の「奴隷」であったという過酷で残忍な専制君主国家ロシアがあり、民謡の多くが、自ずと「哀愁感」を漂わせていたという背景に、革命がもたらす自由と平等の機運により、「新しい感覚である明快な健康さ」が加わり、両者の感覚が統一された歌が生れたのだという指摘であろう。
「カチューシャ」一曲だけでは分かりにくいのだが、戦時下の歌謡であっても何かしら希望がわきでてくるメロディと歌詞からなる曲が沢山あるのは事実である。戦時下の市民生活においても、1941 年 9 月 8 日から 1944 年 1 月 18 日まで 900 日続いたドイツ軍の包囲と激しい戦闘があったレニングラードで、一時期の中断を除いては音楽コンサートが開かれていた。例えば 1941 年 11 月 9 日にはオーケストラと合唱からなる大コンサートが開催され、グリンカ「栄光あれ」（オペラ『イワン・スサーニン』の一部）と並んで、何とベートーベン『交響曲第 9 番』が上演されるという、日本人には全く信じがたいロシア人の「現実の生活」がある。また、ロシア帝国（ロマノフ朝）時代には、民族の存在感をあまり示せなかったロシア以外の 14 の構成共和国の曲が活発に歌われるようになったことに「各民族の民謡の影響」も垣間見える。
筆者の歌詞カードの 83 曲の中にも、グルジア（ジョージア）、ベラルーシ、ウクライナ、アルメニア、の歌が少なからず入っている。また 83 の歌詞カードに含まれる曲で、1980 年代に、ラトビアの作曲家がメロディを作り、ロシアの詩人が歌詞を作り、歌ったのがロシア人の歌手、歌詞の主人公がグルジア人（ジョージア）の画家でロシア人の女優に恋をするという内容の「百万本のバラ」がソ連国内だけでなく欧米、日本を含む世界中で大ヒットした。このことにも井上が指摘する、「ソヴェトになってはじめて開花したソ連邦内各民族の民謡の影響・・・」という状況の一端があらわれてもいる。
　さて、2 人の「ロシア民謡」に関する著書を改めて吟味してみると、井上も北川も、そろって、この「カチューシャ」の歌のメロディも歌詞も好んだことがよくわかる。旋律だけ

[7] 井上頼豊『ロシアの民謡　附　ロシア民謡歌曲集』p.70
[8] 同上　p.70
[9] 浜崎慎吾『戦後日本の「ロシア民謡」の受容と変容』（2013 年）pp.6-10

でなく原詩も、逐語訳では意味は伝わっても、脚韻を含めロシア語のリズムの美しさが損なわれてしまうが、大変完成度の高いロシア詩である。原詩にある「草原の青い鷲」という表現は、ロシアの若い兵士を指すのだが、関の訳詞では、解説が必要なこの語句は省かれてしまう。

「カチューシャ」はソヴェト連邦の時代 1938 年に作られた曲であり（井上や北川の解説では 1942 年となっている）、1941 年 6 月に独ソ戦（ロシアでは大祖国戦争と呼ばれる）が始まると戦場の兵士に広く愛されて歌われるようになり、代表的な戦時流行歌として定着した。当時赤軍によって使用されたロケット砲が、カチューシャの愛称で呼ばれるようになったのも、この歌の流行による影響だといわれる。この歌は戦時下で誰もが知るようになり、戦後は、社会主義を褒め称えるという政治的な場面で歌われるようになった。鉄道列車の発車メロディとしても広く使われた。1980 年代にモスクワからレニングラード（現在サンクト・ペテルブルグ）に向かう夜行列車「赤い矢」号が発車する際には、この曲のメロディが流れていた。21 世紀になっても変わらず有名な曲だが、モスクワの赤の広場での 5 月 9 日の対独戦勝記念日行事で歌われるなど、日本とは全く違う、軍事色の強い使われ方をしている[10]。

この曲は、シベリア抑留から帰還した人たちが日本に持ち帰ったと伝えられるが「ロシア民謡」の中でも、うたごえ運動の枠を超えて全国民的にヒットした知名度の高い歌である。米ソ冷戦が始まっており、アメリカの占領下であり朝鮮戦争が始まった 1950 年当時の日本の社会で「ソ連を意識させるような歌詞」は「カチューシャ」に限らず「ソヴェト歌謡」の日本語訳詞をするうえで「表現を変える」ことにならざるを得なかったことは想像に難くない。このことは単なる推測ではなく、関係者の歴史的証言が文書で残っている例がある。1953 年 6 月 14 日のショスタコーヴィチの組曲『森の歌』の日本初演は日本語訳詞で歌われたが、小学生による児童合唱団にこの歌詞を歌わせるために指揮者が京都市教育委員会の指導部長に許可を求め、歌詞の表現の一部を変更することを条件に許可を得たのである[11]。

さて、「カチューシャ」の歌詞に再び戻って原詩と訳詞を比較すると、祖国防衛の歌である事が明瞭な 4 番目の連が、そっくり省略されている。 1 番の歌詞で原詩にあり訳詞にないのは「梨」であり、これは音符に対しての「字余り」をなくすために削ったのだろう。しかし「高い、けわしい」という岸辺を修飾する形容詞は、原詩では 3 番や 4 番の歌詞の「恋人が戦っているという状況の厳しさ」を暗示する言葉でもあるのだが、日本語では歌詞全体が「春風やさしく吹き」や「やさしその歌声」のように「やさしい（優しい）」という形容と入れ替えられている。原詩 3 番の「遠い国境の戦士に」の部分や 4 番「彼が祖国の大地を守る様に」は戦いを明示する厳しい文言であるが、日本語歌詞ではこの内容は完全に削られて、「平和な世界」にいる女性が遠く離れた恋人を想う歌詞となっている。

「カチューシャ」の「完成版」の歌詞は、関鑑子が 1948 年に書いた歌詞に、あとから共同訳詞者として日本の歌謡曲の作詞者であった丘灯至夫[12]が手を加えて 1950 年に完成した。関の実の娘である小野光子の論文「ロシア民謡を歌う（聴く）前に」（ロシア歌曲研究会 1995 年 4 月）によれば、関鑑子の 1948 年の最初の訳詞は以下の通りである。

[10] 2007 年 5 月 9 日戦勝記念日の様子 https://www.youtube.com/watch?v=ivASIwtHALM (2016 年 1 月 31 日)

[11] 櫻井武雄「森の歌の日本での初演の思いで」芥川也寸志監修・東京勤労者音楽協議会編『森の歌』（おりぞん社、1955 年）pp.62-74

[12] 丘灯至夫（おかとしお）（1917-2009 年）本名 西山安吉。作詞家。ＮＨＫアナウンサー、毎日新聞記者より転じて作詞家。代表作「高校 3 年生」「高原列車は行く」「ガッチャマンファイター」等多数。

1.リンゴの花ほころび
川面にカスミ立ち
君なき里にも
春はおとずれぬ

2.岸辺に立ちて歌う
カチューシャのうた
<u>遠い国境に戦う</u>
君を思いて

3.カチューシャの歌声
<u>夢にきく兵士</u>
今なお君を愛すと
優しその歌声

4.リンゴの花ほころび
川面にカスミ立ち
君なき里にも
春はおとずれぬ

〈1948 年〉（下線は小野光子による）

1949 年に「バイカル湖のほとり」「バルカンの星の下に」が、1950 年 9 月には「カチューシャ」と「シベリア大地のうた」のレコーディングが行われたが、うたごえ運動の人たちによる「自主制作の」レコードであったようだ。ところがこの中の「カチューシャ」については、他の曲と違って大手レコード会社のコロムビアレコードが別途に商業ルートに乗せようとして当初の発売予定日を半年延期して、歌詞を変更して翌年 1951 年 3 月にようやく発売となった。コロムビアレコードは、当時はまだ珍しい存在であった「自社の専属作詞家」の丘灯至夫に関の訳詞を改作させた。元の歌詞にあった「遠い国境に戦う」「夢にきく兵士」という戦争を想起させる色彩を無くすだけでなく、より洗練された歌詞にする為である。その結果が 1950 年作の現在も日本で広く歌われている歌詞である。大手レコード会社による商業化の過程での、広範囲の層に受容させるための止むを得ない改作と、それを実行するための延期であったのだろう。それから時が流れ、日本では「カチューシャ」は「ロシア民謡」を代表する曲としてブームが去ったいまでも愛好家や中高年世代には広く親しまれていて、来日するロシアの合唱団は演奏曲目に必ずといってよいほどこの曲を「入れさせられて」いる。ロシアとは違い、この歌は戦後になって「平和運動」であるうたごえ運動の中で広く歌われ、やがて運動の内部だけでなく、1959 年の第 10 回 NHK 紅白歌合戦で初出場の森繁久彌がこの歌を歌い、うたごえ運動や労働運動と無縁の合唱団も歌い、学校の音楽教科書にも載った。歌自体が持つパワーが、米ソ対立時代の背景を押しのけて不動の地位を確立した例ともいえる。

3. Россия - Родина моя ロシア私の故郷

Музыка: В.Мурадели Слова: В.Харитонов

作曲　ムラジェリ 作詞　ハリトーノフ
逐語訳

Когда иду я Подмосковьем,
Где пахнет мятою трава,
Природа шепчет мне с любовью
Свои заветные слова.

1. 私がモスクワ郊外を歩いている時、
踏みつけられた草が匂う場所で、
郊外の自然（地）が心を込めて私にささやくのは
大事に胸に秘められた自分の言葉。

Вдали рассветная полоска
Осенним пламенем горит,
Моя знакомая березка
Мне тихо-тихо говорит:

遠くに暁の縞が
秋の情熱のように灯っている、
私の馴染みの白樺が
私に静かに 静かに語るのは：

Припев:	(くりかえし)
Россия, Россия...	ロシア、ロシア・・・
Родные вольные края,	愛しい自由の国、
Россия, Россия...	ロシア、ロシア・・・
Россия - Родина моя.	ロシアは私の祖国
Когда порой плыву по Волге	2.　時折ヴォルガを船で行く時には、
И чайка вьется за кормой	かもめも艫（船尾）をぐるぐる舞う
Гляжу, гляжу на берег долго,	（私は）長い時間岸辺を眺めつづける、
Не расстается <u>он</u> со мной.	<u>岸辺は</u>私と別れようとしない。
Машу приветливо рукою,	（私は）愛想よく手を振る、
А <u>берег</u> рядышком идет.	すると<u>岸辺は</u>（私に）並んで歩む。
И кто-то поздно над рекою	誰かが夜が更けても川面で
Раздольным голосом поет:	のんびりとした声で歌っているのは：
Припев.	（くりかえし）
Россия, Россия...	ロシア、ロシア・・・
Родные вольные края,	愛しい自由の国、
Россия, Россия...	ロシア、ロシア・・・
Россия - Родина моя.	ロシアは私の祖国
Когда меня московский поезд	3.モスクワの列車が私を
Уносит в дальние места,	遠い土地に連れ去るときに、
Хлеба мне кланяются в пояс,	穀草が私に深くお辞儀をする、
Мигает ранняя звезда.	宵の星がまばたきしている。
На голос Родины я вышел -	祖国に私は大声を出していう
Как ты, Россия, хороша!	ロシアよ、何とおまえはすばらしい！
Смотрю вокруг и сердцем слышу -	まわりを見て心に聞こえてくるのは
Поет, поет моя душа:	私の魂が歌っている、歌っているのが：
Припев.	（くりかえし）
Россия, Россия...	ロシア、ロシア・・・
Родные вольные края,	愛しい自由の国、
Россия, Россия...	ロシア、ロシア・・・
Россия - Родина моя.	ロシアは私の祖国

1959
ロシア私の故郷

訳詞　合唱団白樺（蒲生眞郷）	訳詞　関　鑑子
秋草咲きかおる	１　モスクワのほとり行けば　かわらぬおもかげ
モスクワの郊外を	かぐわしの野の草　思い出なつかし
歩めばなつかしい	朝焼けあざやかに　遠く火ともえて
小川よ　野原よ	目ざめの白樺　優しくささやく

朝焼け冴えわたる　林を過ぎれば
やさしい白樺は　私にささやく
　ロシア　ロシア　ゆたかな大地よ
　ロシア　ロシア　私の故郷

かもめは低く飛び
ヴォルガをゆく船の
舳先にたてば　河風さやかに
はるかな川岸を　歩む若者の
歌声はゆたかな　河面に流れる
　ロシア　ロシア　ゆたかな大地よ
　ロシア　ロシア　私の故郷

モスクワを遠く去りゆく
汽車の窓辺には
夕べの星ひとつ　早くも輝く
私の胸深く　迫るはこの歌
豊かな故郷を　讃えるこの歌
　ロシア　ロシア　ゆたかな大地よ
　ロシア　ロシア　私の故郷

(下線は筆者)

　ロシア　ロシア　わたしのふるさとよ
　母なる大地　大いなる祖国
　母なる大地　大いなる祖国

２ ヴォルガを下る船に　かもめたわむれて
岸辺を歩む人の　語らい楽し
やさしく手をとり　よりそいて行けば
遠くひびく歌は　なつかしいあの歌

　ロシア　ロシア　わたしのふるさとよ
　母なる大地　大いなる祖国
　母なる大地　大いなる祖国

３ モスクワを遠くあとに　ひろき野に立てば
豊かに穂波ゆれ　星はまたたく
祖国の呼ぶ声に　高なる我が胸
母なるふるさとに　ささげんわが歌

　ロシア　ロシア　わたしのふるさとよ
　母なる大地　大いなる祖国
　母なる大地　大いなる祖国

ああ・・・

蒲生訳の方が時期的に後に訳されたと推測するが蒲生は、関の訳も参考にしていると感じる。原詩は擬人法表現が多用されている。両訳詞ともに原詩の擬人法は次に述べる部分を除いては崩さず、原詩に準拠して日本語でも擬人法となっている。

両方の訳詞ともに味わい深い歌詞であるが、2 番については原詩の解釈を間違えた可能性がある。あるいは、敢えてこのような意訳にしたのかもしれない。

関「岸辺を歩む人の　語らい楽し」
蒲生「はるかな川岸を　歩む若者の」

下線部分は、原詩では он（人称代名詞 3 人称単数男性）で、英語の he に相当するが、原詩では「人間」を指してはいない。この代名詞が指すのは男性名詞の「岸辺」「川岸」であり、長いながいヴォルガの岸辺が船で長く旅しても離れずにくっついてくると表現しているのだ。その意味を訳詞でも表現可能と思うのだが、歌ってみて分かりにくいので、岸辺にいる若者（人）を創出したのかもしれない。両方の訳ともに原詩の内容を出来る限り、残そうとしているが、蒲生によりその傾向は強い。蒲生はこの曲について解説[13]をしている。作曲のムラジェリのメロディについて本人は記述しているつもりであるが、期せずしてハリトーノフの作詞の解説にもなっている。

[13] 蒲生眞郷『ロシア民謡とソビエト歌曲訳詞百選』p.245

「スケールの大きなロシア讃歌で B.ムラジェリの作品の中でも最もすぐれたものの一つとされている。モスクワ郊外を散歩するとき白樺がささやくロシア讃歌、ボルガ河を舟で下るとき川岸から流れるロシア讃歌、そしてモスクワを離れようとするとき自分の胸にこみあげるロシア讃歌を劇的にうたいあげている」

上記の内容を蒲生が感じとったのは、名前をあげている作曲のムラジェリのメロディを聴いてというよりも、ハリトーノフの詩を読んで、強く思ったのだと筆者には思える。また作曲者については、歌が作られた時代のソ連時代ではなく、解体してそれぞれ独立した 15 の別々の共和国になっている現代であるからこそ、筆者が思うことがある。それは、ムラジェリという名前はロシア人のそれではなく、ジョージア（グルジア）の人なのである。ジョージアで生れ、モスクワ音楽院で作曲を学んだことがわかっている。作詞のハリトーノフの名はロシア人である。詩の内容はモスクワを離れてジョージアのゴリに向かう作曲者のムラジェリの心情をロシア人のハリトーノフが描写しているのかもしれない。
ソ連時代は、ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人、あるいはグルジア人（ジョージア人）という意識は希薄で、皆が「ソ連人」という意識だった。ソヴェト連邦がなくなり四半世紀が経った現在、それぞれの国が政府の方針も一般の人々の意識も文字通りバラバラになってしまい、お互いに敵対し、傷つけあうことが多くなってきたようにもみえる。「ソ連歌謡（歌曲）」の歌詞の成り立ちや背景を観察すると、ソ連時代から現代への世の中の変遷を意識することにもなる。

4. ОЙ, ПОЛНА, ПОЛНА КОРОБУШКА… 行商人

原詩）	逐語訳
Слова Николая Некрасова	作詞　ニコライ・ネクラソフ
«Ой, полна, полна коробушка,	1.おお、小箱は満杯
Есть и ситцы и парча.	更紗も錦もあるよ
Пожалей, моя зазнобушка,	私の意中の人よ　憐れんでおくれ
Молодецкого плеча!	若者の肩を
Выди, выди в рожь высокую!	2.出ておいで　丈の高いライ麦畑へ
Там до ночки погожу,	そこで夜まで待ってるよ
А завижу черноокую –	そして黒い瞳のお前を見たら
Все товары разложу.	品物全部広げよう
Цены сам платил немалые,	3.こちらも原価はたんと払ったんだから
Не торгуйся, не скупись:	値切ったり　けちけちしないで
Подставляй-ка губы алые,	真っ赤な唇を突き出しておくれ
Ближе к милому садись!»	愛しい人のそばにもっと近くお座り
Вот уж пала ночь туманная,	4.さあ霧深い夜が降りてきた
Ждет удалый молодец.	勇敢な若者は待っている
Чу, идет! — пришла желанная,	ほら来る—待望の彼女がやってきた
Продает товар купец.	行商人は品物を売りにかかる

Катя бережно торгуется,
Все боится передать.
Парень с девицей целуется,
Просит цену набавлять.

Знает только ночь глубокая,
Как поладили они.
Расступись ты, рожь высокая,
Тайну свято сохрани!

訳詞 津川　主一

１ かついだ荷物の中は　キャラコと錦
肩にめり込みそうだ　とてもたまらぬ
肩にめり込みそうだ　とてもたまらぬ
　ハイダハイダ　ハイダ
　ハイダハイダ　ハイダハイダッダ
　ハイダハイダ　ハイダッダ　おお　野道は長い

２ 高いお金を出したので　値切りはごめん
夕日がかくれたなら　たずねておくれ
夕日がかくれたなら　たずねておくれ
　ハイダハイダ　ハイダ
　ハイダハイダ　ハイダハイダッダ
　ハイダハイダ　ハイダッダ　おお　野道は長い

３ 青い麦の穂波立つ　夜の野原で
もうけた金をならべ　君に捧げる
もうけた金をならべ　君に捧げる
　ハイダハイダ　ハイダ
　ハイダハイダ　ハイダハイダッダ
　ハイダハイダ　ハイダッダ　おお　野道は長い

5.カーチャは慎重に値切りにかかる
すべてを渡すのを恐れている
若者は乙女にキスをする
値段を上げてくれと頼む

6.闇の深い夜だけが知っている
二人がどう折り合いをつけたのかを
背を伸ばせ、丈の高いライ麦よ
秘密を大切に守るのだ

訳詞 北川　剛

1. おぉ　箱の中はキャラコと錦
　肩にめり込みそうだ　いたわっておくれ
　肩にめり込みそうだ　いたわっておくれ

2.夕日が沈んだら　会いにお出でよ
　麦の穂　波立つ　畑の中へ
　麦の穂　波立つ　畑の中へ

3.元値が高いから　値切りはごめん
　それよりも　私を愛しておくれ
　それよりも　私を愛しておくれ

4.夜更けの霧の中で　恋の取引
　どんな話になったか　誰も知らない
　どんな話になったか　誰も知らない

5.夜の帳（とばり）だけが　それを知っている
　ざわめく麦の穂よ　秘密を守ろう
　ざわめく麦の穂よ　秘密を守ろう

6. おぉ　箱は空っぽだ　さぁ出かけよう
　可愛いあの娘には　指輪を残し
　可愛いあの娘には　指輪を残し

歌詞の題名、あるいは詩行 1 行目は「おお、小箱(行李)は満杯」といった意味だが、歌詞にはいくつかの variation がある。そのなかには日本語の「行商人」という意味のコロベイニキ（Коробейники）が曲名となっているものもあり、日本語訳詞の曲名は津川も北川もそれを採用している。原詩の作詞者が存在するので厳密な意味では民謡ではないのだが、19 世紀の詩人のネクラーソフ（1821-1877）が 1861 年に詠んだ叙事詩の冒頭部分に作曲者不詳の曲がついて民謡化したといわれている。メロディはハンガリー由来の民族舞曲であるチャルダーシュ風のもので踊りにマッチする。戦後の日本に初めて入って来たのは実はソ連（ロシア）からではなく、アメリカからだという説もある。アメリカのロシア系移民の

「コロブチカ」（ロシア語の発音はコロブシカ）というフォークダンスとして紹介されたのだという。複数のロシア民謡の訳詞を手掛けた（英語訳歌詞からの重訳といわれる）津川主一の訳詞でも歌われているので北川の訳詞の特徴を見るために、併記して紹介する。北川の訳詞はソ連からの楽譜のロシア語から直接訳詞されている。

歌詞の内容は、男の行商人とその買い手である女性との間の衣類（商品）と恋の取引を巡る駆け引きを表現しているが、北川訳詞は、少ない字数でもとの意味がわかるように巧みに再現できている。そのうえでメロディにきちんと乗る歌詞となっている。津川訳詞は、もちろんメロディに乗る歌詞ではあるが、原詩の意味あいはかなり希薄になってしまっている。北川訳はうたごえ運動という枠内で、ロシア民謡であっても日本民謡であっても、それ以外の国の民謡であっても、国籍を問わず民衆の歌のメッセージ性を重視する傾向が訳詞の方針にも貫かれているので、原詩の意味合いをできるだけ残す努力がなされていると感じる。北川は著書『ロシア民謡アルバム』にこの歌を収録し 2 ページにわたる解説を載せているが、メロディも歌詞の由来も、本人が気にいった様子が解説[14]の最後の数行に凝縮されている。

> これは 19 世紀の有名な詩人ネクラーソフの書いた長篇詩『行商人』の中の一節で、日本でもよく知られています。ソヴェトの名テノール、コズロフスキーの独唱で人気がありますが、曲集には男声合唱に編曲したものをのせておきました。

5. Половецкая пляска с хором　韃靼人の踊り（ポロベッツ人の踊り・合唱付）

Текст песни Половецкая пляска с хором Улетай на крыльях ветра, Александр Бородин Опера Князь Игорь:	合唱付きポロベッツ人の踊り アレクサンドル・ボロディンのオペラ イーゴリ公・風の翼に乗って飛び去れ
Улетай на крыльях ветра Ты в край родной, родная песня наша, Туда, где мы тебя свободно пели, Где было так привольно нам с тобою.	逐語訳 風の翼に乗って飛び去れ お前、故郷の果てへわれらの故郷の歌よ、 われらがお前を自由に歌っていたところへ、 われらがお前とそんなにのびのびしていた所へ
Там, под знойным небом, Негой воздух полон, Там под говор моря Дремлют горы в облаках; Там так ярко солнце светит, Родные горы светом заливая, В долинах пышно розы расцветают, И соловьи поют в лесах зеленых. И сладкий виноград растёт. Там тебе прибольней, песня, ты туда и улетай!	そこでは灼熱の空の下で 大気は安らぎで満ちている そこでは海のざわめきの下で 山々が雲の中でまどろんでいる。 そこではそんなに太陽が明るく輝き、 故郷の山々を光で満たしながら、 ,渓谷では薔薇が咲きほこっていて、 ナイチンゲールが緑の森で歌っている 甘いブドウも実っている。 そこでお前はよりのびのびしている、歌よ、 お前はそこへ飛び去れ！
Пойте песни славы хану! Пой!	

[14] 北川剛編『ロシヤ民謡アルバム　解説付』p.11

Славьте силу доблесть хана! Славь!	ハンの栄光の歌を歌え！歌え！
Славен хан! Хан!	ハンの勇敢さを称えなさい、称えよ！
Славен он, хан наш!	輝かしいハン！ハン！
Блеском славы солнцу развен хан!	彼は輝かしい、われらがハンは！
Нету равных славой хану! Нет!	栄光の輝きによりハンは太陽に等しい
	ハンの栄光と比べるものはない！ない！
Чаги хана славят хана.	
Славят хана своего.	ハンの女奴隷たちはハンを称える。
	自分たちのハンを称える。
Пойте песени славы хану! Пой!	
Славьте щедрость, славьте милость! Славь!	ハンに栄光の歌を歌ってください！歌え
Для врагов хан грозен он, хан наш!	寛大さと慈悲を称えなさい！称えよ！
Кто же славой равен хану, кто?	敵にとってハンは恐ろしい、われらがハンは！
Блеском славы солнце равен он!	誰がハンの栄光に匹敵するか、誰が？
	栄光の輝きによりハンは太陽に等しい！
Славой дедом равен хан наш,	
хан хан, Кончак!	われらがハンは祖先の栄光に匹敵する（並ぶ）
Славой дедам равен он!	ハン、コンチャックハン！
Грозный хан, хан Кончак!	彼は祖先の栄光に並ぶ
	厳しいハン、コンチャックハン！
Славен хан, хан Кончак!	
Славен хан, хан Кончак!	輝かしいハン、コンチャックハン！
хан Кончак!	輝かしいハン、コンチャックハン！
	コンチャックハン！
Пляской тешьте хана, чаги,	
хана своего, своего.	踊りでハンを喜ばせなさい、女奴隷たち
Пляской вашей тешьте хана!	自分たちのハンを、自分たちの。
Пляской тешьте!	お前たちの踊りでハンを喜ばせなさい！
Наш хан Кончак.	踊りで喜ばせなさい！
	われらがコンチャックハン

作詞　作者不詳　作曲ボロディン	ダッタン人の踊り　オペラ「イーゴリ公」より
訳詞津川　主一[15]	訳詞　蒲生眞郷[16]
	（乙女たちの流れるような踊り）
そよげ西風よ　運べ歌を	風の翼に乗って　とび行け歌よ　われらの歌よ
ふるさとへ　住み馴れしは　その郷（さと）よ	自由の国わがふるさとへ　うたごえあふる　わが
乙女たちは　群れ遊ぶ	ふるさとへ
のどかに吹け　春の風	
のどかに吹け　春風よ	広き大空のもと　大気やすらぎに満ち
海原より　山の峰まで	波は岸辺に語り　山に雲は憩う
赤き陽に燃ゆる　緑の丘　さすらわん	燃ゆる太陽の輝き　故郷の山は光に満つ

[15] ともしび編『うたの世界 533』p.130
[16] 蒲生眞郷『ロシア民謡とソビエト歌曲訳詞百選』pp.97-99

茂る草に　まじり咲く
薫り高き　花うばら.
　木の実も　熟れたり
　そよげ西風よ　運べわが歌

バラの花は谷間埋め　緑の森に小鳥は歌う

ぶどうの房は色づく　うたよ、　とびゆけはるか
遠く、わがふるさとへ

（全体の踊り）
歌えよわがハン（汗）を歌え
たたえよわがハンを　いざ
たたえよ　ハン
たたえよ　ハンを
輝く太陽　ハン
栄光はてなし　ハン
（女どれいの踊り）
チャーギ　ハン　はえあれ　ハン
はえあれ　ハン　とわに　はえあれ
（全体の踊り）
歌えよわがハンを　ハン
いたわり忘れぬ　ハン
敵には　ハン
雷（いかずち）　ハンよ
比べるものなし　ハン
輝く太陽　ハン

（男たちの踊り）
栄光祖先に並ぶ　わがハン　コンチャクハン
栄光祖先に並ぶ　わがハン　コンチャクハン
わがハン　コンチャクハン

（乙女たちの流れるような踊り）
風の翼に乗って　とび行け歌よ　われらの歌よ
自由の国わがふるさとへ　うたごえあふる　わが
ふるさとへ

広き大空のもと　大気やすらぎに満ち
波は岸辺に語り　山に雲は憩う

燃ゆる太陽の輝き　故郷の山は光に満つ
バラの花は谷間埋め　緑の森に小鳥は歌う

ぶどうの房は色づく　うたよ、　とびゆけはるか
遠く、わがふるさとへ

（男たちの踊り）
栄光祖先に並ぶ　わがハン　コンチャクハン
栄光祖先に並ぶ　わがハン　コンチャクハン

わがハン　コンチャクハン

（全体の踊り）
おどりでたたえよ　おどりでたたえよ
おどりでハンを　チャギ
たたえよハンを　チャギ
おどりでハンを　チェギ
たたえよハンを　チャギ
たたえよう　コンチャク　ハン
おどりで　たたえよ
おどりで　コンチャクハン
　　ああ、コンチャク　ハン

北川、井上、関の３人とは違い、蒲生の本職は音楽家ではない。他の３人はそれぞれの動機により音楽と並行してなのか、あるいは音楽に先立ってなのか社会主義の教義に共鳴する心情が著書にも色濃く見られるが、蒲生の著作の記述には他の 3 人に共通する社会主義やソヴェトに対する熱い思いが述べられている個所がほぼ見当たらない。だが、蒲生は、「ロシア民謡」が好きで楽譜を入手する目的で合唱団白樺に入団したのがきっかけで、それ以来亡くなる直前まで 33 年の長きにわたり白樺で歌い続けると同時に歌詞にも特別の興味を持ち、白樺の訳詩集団である研究会の中心人物であり続けた。シベリア抑留経験でロシア語を覚えた北川、井上と違って蒲生には兵役経験はなく、ロシア語は大学生時代に第二外国語として学んだが、その後も理科系の学者という本職でも必要だったことが、そうさせるのか、高いロシア語能力が単独での訳詞にも垣間見える。

さて、蒲生がこの曲の歌詞の訳詞を手掛けようとした動機はなんだったのだろうか。著書『ロシア民謡 ソビエト歌曲 訳詞百選』の『ダッタン人の踊り』の解説[17]は他の 99 曲に比べても長文で丁寧である。この曲に格別の思いがあったのではと窺える。一節を抜粋する。

> 作曲者,A.ボロディン（1833-1887）はペテルブルグ生れ、ロシア国民主義音楽を推進した「力強い仲間達」の一人。グルジア人貴族の私生児として生れ、農奴であった Б.ボロディンに育てられた。ペテルブルグの医科大学に学び、化学の研究を志し外遊、化学と共に音楽も勉強し若干の作品も書いている。1862 年帰国して M.バラキレフと知り合い、彼のもとに集まって来ている「力強い仲間達」のグループに入り本格的な作曲活動に入る。しかし化学の教授を本職としていたので作曲は常にとどこおりがちであった。そのような中にあっても 2 つの交響曲、2 つの弦楽四重奏、交響詩《中央アジアの高原にて》などの名作を残している。オペラ《イーゴリ公》はグループの中の理論的なリーダーであったスターソフのすすめで 1869 年に着手したが、ついに完成しないまま死んだ。のち H.リムスキー・コルサコフと A.グラズノフによって完成され、1891 年キエフで初演された。彼の東洋的な明るい作風は、その血統に由来するのかもしれない。

蒲生もボロディン同様に「化学の教授を本職としていた」。自分自身の境遇と重ね合わせ、

[17] 蒲生眞郷『ロシア民謡とソビエト歌曲訳詞百選』p.52

音楽（合唱と訳詞）を趣味として精一杯行うためのボロディンは恐らくお手本だったのである。そのうえで、彼の訳詞とこの曲の日本での受容の背景を見てみよう。
1) 歌詞が日本語で定着せず、旋律のみが受容され有名となった。
2) 歌のタイトルが変容した。
オペラ『イーゴリ公』の第 2 幕の「ポロヴェツ人の踊りと合唱」は、ボロディンの作曲のなかでも最も有名な曲のひとつであり、またクラシック音楽としても有数の人気曲である。通称で「ダッタン人の踊り」と呼ばれ、しばしばオーケストラのコンサートなどで、オペラとは独立して演奏される。オペラでは合唱を伴うが、演奏会では合唱のパートを省略することが多い。序曲や「ポロヴェツ人の行進」などと併せて『イーゴリ公組曲』とすることもある。逆に合唱団が演奏する際には、日本では「合唱」のみがピアノ伴奏で歌われる。

オペラの原作は、『イーゴリ軍記』あるいは『イーゴリ遠征物語』と日本語では称される 12 世紀末成立と推定されている中世唯一といってよいロシア文学作品である。この作者不詳のフォークロア的な『イーゴリ軍記』は、一貫してロシア人であるイーゴリ公に対する叙事詩・頌詩であるのに対し、これをオペラにしたボロディンの『イーゴリ公』は、作曲者自身の執筆した台本により、闘いの相手である異民族のポロヴェツ人に対するシンパシーが表現される。「ダッタン人の踊り」（題名の正確な訳は「ポロヴェツ人の踊り合唱付）の歌詞の内容はイーゴリの敵のコンチャク・ハンとポロヴェツの奴隷の故郷を称えるもので、捕虜にしたイーゴリ公を慰めるための宴席の場面で歌われる。文学作品には無いこの場面[18]と歌や踊りをボロディンが創造したことは、彼が公式には（戸籍上は）ロシア人であるが、血統的に異民族（グルジア人＝ジョージア人）との混血であることを反映しているかもしれない。

日本では、プロのオーケストラだけでなく比較的技量の高いアマチュアの吹奏楽団が好んで器楽曲として演奏するようなポピュラー性がある。従って多くの人が旋律を知っているが、歌詞が意識されることは意外に少なく、他の「ロシア民謡」と違ってクラシック音楽の受容形態を帯びている。結果として、「ロシア民謡」のファンにもクラシック音楽ファンにも人気がある。

日本語訳詞はどれもあまり定着しているとはいえない。オペラの内容と関係のない創作詞が付されることもあれば、原詩に忠実な蒲生訳は、実際に合唱団白樺などにより歌われてきた。

津川訳の方が蒲生訳よりもややポピュラーかもしれない。津川訳は英語からの重訳と推定される。歌声喫茶で素人が歌うには、歌詞が簡略化されていて歌いやすいであろう。蒲生訳は原詩に忠実な印象を受ける。蒲生訳の惜しむらくは、蒲生の訳詞（女たちの踊り）の部分の誤謬である。
蒲生訳では、

（女どれいの踊り）
チャーギ　ハン　はえあれ　ハン
はえあれ　ハン　とわに　はえあれ

原詩と逐語訳は、次の通り。

Чаги хана славят хана.　　ハンの女奴隷たちはハンを称える。

[18] 木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』（岩波文庫）段落 XXIX、200 節に歌詞のモチーフになったと推定できるポロヴェッツの 2 人のハン（汗）、グザーとコンチャークの対話がある。

Славят хана своего.　　自分たちのハンを称える。

蒲生は、一行目の「チャーギ　ハン」を人物の固有名詞として訳している。しかし一行目に 2 つある хана（ハナ）の一つ目は хан（ハン）の生格で前の чаги（チャーギ）に掛かる語であり、2 つ目の（ハナ）は、（ハン）の対格であり他動詞 славят（三人称複数現在形で意味は「称える」）の目的語である。この場合、主語は勿論 чаги（チャーギ）（女奴隷たち）である。蒲生訳は動詞 славят(称える)の主語は、省略された(英語の they に相当する)と解釈したのだろう。

いずれにせよ、原詩の歌詞内容はあまり関心が持たれていない。だが、合唱団白樺は蒲生の訳詞で「原詩に忠実な訳詞で歌う」原則を維持し 1958 年、1970 年、1975 年、1985 年、2000 年、と時代を超えて定期演奏会で歌い続けてきた。その理由は単に旋律が気にいったからであろうか。文学作品の「イーゴリ軍記」もボロディンの作詞も読んでみると、内容にはそれぞれ深い意味があるとわかる。歌詞を含め文学作品は、大衆受けするものだけに価値があるのではないので、旋律によって『イーゴリ軍記』の内容や「ダッタン人の踊り」の歌詞を知る機会が生まれ、結果として希少なものが後世に伝わっていくならばそれもよしといえよう。

日本でよく知られる通称が、「韃靼（ダッタン）人」になったいきさつは、一見、些細な誤解かもしれないが、日本人のロシア観とロシア連邦内の非ロシア民族観を示してもいる。オペラ「イーゴリ公」が日本で完全な形で初演されたのは戦後の 1965 年、NHK 交響楽団と、旧ユーゴ・スラヴィア連邦クロアチア共和国のザグレブ国立劇場合唱団によるものであった。この時期は、日本での「ロシア民謡」隆盛の時代でもあったが、「韃靼（ダッタン）人の踊り」の旋律は戦前の 1939 年にはすでにオペラとは別に知られていた。「ポロベックの踊り」としてフランスでディアギレフ[19]がバレエ化して上演していたのを日劇ダンシングチーム関係者がコピーして、日劇の第 66 回公演として 1939 年 10 月 30 日から約一か月間上演したからである。当時は、ロシア語読みのポロヴェツではなく、「ポロベック」と表現していたが、人気が出た公演の内容を新聞で論評する時に執筆者が「韃靼（ダッタン）人」と表現しており、この辺りからこの名称が定着して戦後に持ち越されたようだ。韃靼（ダッタン）人とポロヴェツ人（あるいはクマン人）は別の民族で歴史も背景も違う。明治以降、言語の統一に熱心だった為政者たちの思惑により自分たちは単一民族だと思ってきた日本人が、当時も現在も、ロシアに限らず他国の多民族性や民族問題に無関心、無頓着であることがここにも現れている。

しかし一般には、この通称の奇妙さが問題になることもなく、この曲は第一に旋律の良さが好かれていて、原詩を基にした津川訳や蒲生訳だけではなく、ポップス歌手等によって、全くの創作詩が付けられて歌われているケースも多いのが現状である。

おわりに

関鑑子、北川剛、井上頼豊、蒲生眞郷の 4 人のうたごえ運動指導者たちの「ロシア民謡」

[19] セルゲイ・ディアギレフ　（ Сергей Павлович Дягилев, 1872 - 1929 年）　ロシアの芸術プロデューサー。バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）の創設者。パリで、1909 年 5 月 19 日、シャトレ座で行われた「セゾン・リュス（ロシア・シーズン）」では、ロシア帝室劇場のレパートリーに手を加えた『イーゴリ公』より「韃靼人の踊り」、『クレオパトラ』などが披露され、アンナ・パヴロワやヴァーツラフ・ニジンスキー、タマーラ・カルサヴィナなど、当時のロシアで最も優れた若手舞踊家の踊りや、「韃靼人の踊り」における勇壮な男性ダンサーの群舞は、19 世紀後半からバレエが芸術ジャンルとしては凋落してしまっていたパリの観客に衝撃を与えた。この公演はあくまでも臨時のバレエ団によるものであったが、事実上バレエ・リュスの旗揚げと見なされている。

のそれぞれの訳詞に特定の傾向や個性はあるだろうか。訳詞は、原詩を翻訳したものなので、訳詞同士では、作者の違う原詩同士の比較ほどには差異は出てきにくい。訳詞者の名を伏せると受容する人は同一人物による訳詞と思う場合もありそうだ。本稿で取り上げた歌は 4 曲と少ないが、そのうちの二つの歌詞には 4 人の内の２人による別々の２つの訳詞があり、比較が可能であった。

「ロシア私の故郷」は、関と蒲生が訳詞をしていて、両方の歌詞が複数の合唱団により実際に歌われた。2 人の訳詞は似た雰囲気があり差異はあまり感じられない。

ところが、全く歌われていないため今まで気がつかなかったが、井上も「カチューシャ」の訳詞をしている。関の訳詞と比較したところ、訳詞に 2 人の個性が感じられた。また訳詞者ではないが北川の「カチューシャ」についての見解も著書の記述でわかった。

個別の曲への思いは、4 人の訳詞そのものだけではわからなくても、それぞれの著者の歌詞解説や演奏上の注意事項の記述などに現われていた。また、音楽の専門家でなく、化学の教授である蒲生は、理系の科学者の性格の反映なのか、原詩が本来持つ歌詞の内容を忠実に表現しようとする傾向が 4 人のなかではもっとも強いと感じられた。

うたごえ運動の指導者でもあった音楽家 3 人に共通する明確な傾向として、ソヴェト、ロシア、そして社会主義への憧憬が非常に強い。そのことは訳詞と並行して記述している曲の解説などでわかる。但し、3 人の著書の執筆年代は 1950 年代～60 年代の社会主義やソ連が日本で最も意識された時代であったことを忘れてはならない。その思いが訳詞にもかなり反映されていると感じる。

これに対し、蒲生が『ロシア民謡 ソビエト歌曲 訳詞百選』を出版したのは、音楽家 3 人よりも 20～30 年あとの時代で、蒲生自身の最晩年の 1986 年であり、同時にソ連ではペレストロイカが始まりソ連解体につながっていく前夜でもあり、社会主義に対する熱気は醒めつつあったので、蒲生の解説は 3 人と比較すると「熱気がある」というよりも「冷静で落ち着いた」記述になっている。各人の特徴の一つとして北川は比較的短い歌詞を選択する傾向がある。

2013 年の最初の論文以降は、テクスト分析にほぼ特化してきた筆者の研究は、「ロシア民謡」受容の母体である、うたごえ運動の考察を再開する必要性も感じる。うたごえ運動指導者の訳詞に焦点を合わせた今回の試みをそのきっかけにしたいと思っている。

主要参考文献

飯塚書店編集部編『ロシヤ民謡集』飯塚書店、1956.
井上頼豊『「ロシアの民謡」附ロシア民謡歌曲集』筑摩書房、1951.
井上頼豊編『ソヴェト合唱曲集』筑摩書房、1953.
井上頼豊訳監修『ロシア民謡』理論社、1956.
井上頼豊『あなたの音楽手帖』新日本新書、1967.
井上頼豊『カザルスの心―平和をチェロにのせて―』岩波ブックレット No.212 1991.
井上頼豊 著・外山雄三 林光 編『聞き書き 井上頼豊－音楽・時代・人』音楽之友社、1996.
小野光子『ロシヤ民謡を歌う（聴く）前に』ロシヤ歌曲研究会、1995.
小野光子『回想 音楽の街 私のモスクワ』朔北社、2011.
蒲生眞郷『ロシア民謡とソビエト歌曲訳詞百選』新読書社、1986.
音楽舞踊団カチューシャ編『カチューシャ愛唱歌集』復刻版、ロシア音楽出版会 2012.
北川剛『ロシア民謡アルバム　解説付』音楽之友社、1959.
北川剛『民族と風土のうたごえ　ロシア民謡の歴史』音楽の友社、1968.
北川剛『ロシア民謡、我が生涯』芸術現代社、1986.
木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』岩波文庫、1983.

合唱団白樺編『トロイカ　第 11 号　創立 40 周年記念特別号』合唱団白樺、1990.
合唱団白樺編『合唱団白樺 50 年の歩み』合唱団白樺、2000.
合唱団白樺編『創立 60 周年を迎えて』合唱団白樺、2010.
合唱団白樺編『創立 60 周年を迎えて―文集編』合唱団白樺、2010.
関鑑子追想集編集委員会編『大きな紅ばら：関鑑子追想集：伝記・関鑑子』大空社、1996.
関鑑子「歌声を平和の力に」『平和運動 20 年記念論文集』大月書店、1969.
関鑑子『歌ごえに魅せられて』音楽センター、1971.
舟曙夢譯編『ろしあ民謡集』大倉書店、1920.
藤本洋『歌はたたかいとともに―中央合唱団の歩み』音楽センター、1971.
藤本洋『うたは闘いとともに―うたごえの歩み』音楽センター、1980.
Works sited.
Чулков М. Д. *Собрание Разних Песен.* Санктптербург, 1913.
Лывов-Прач. *Собрание Народных Русских Песен с их голосами.* Москва, 1955.
Новикова А.М. *Русская поэзия XVIII-первой половины XIX века и народная песня.*Москва, Просвещение, 1982.
Morosan,Vladimir. *Choral Performance in Pre-Revolutionary Russia* .U.M.I Research Press, 1986.
Павленко Г. В. *Ваши любимое песни.* Смоленск, Русич, 1995.
Песенник анархиста-подпольщика. http://a-pesni.org/org.php　(31.1.2016)
Земцовский И.И. *Русская народная песня: неизвестные страницы музыкальной истории*: сборник научных трудов Серия "Фольклор и Фольклористика", Ленинградский государственный институт театра, музыки и кинематографии им. Н.К. Черкасова С.-Петербург , РИИИ , 1995.